

令和4年度 学校評価報告書(目標設定・実施結果)

視点	4年間の目標 (令和2年度策定)	1年間の目標	取組の内容		校内評価		学校関係者評価 (3月17日実施)	総合評価(3月31日実施)	
			具体的な方策	評価の観点	達成状況	課題・改善方策等		成果と課題	改善方策等
1 教育課程 学習指導  ※ JSL=Japanese as a second language	①確かな学力の定着および学習習慣の確立に向けた取組を行う。 ②自己肯定感とコミュニケーション力の向上を目指し、一層の授業改善を進める。 ③個々の能力・状況に応じた学習支援体制を整える。 ④日本語を母語としない(JSL※)生徒に対しても確かな学力の保証を図る。	①生徒が「わかる」「学力がついた」と実感し、自ら学習に取り組めるよう工夫する。 ②授業改善を進め、他者の考えを取り入れたり、協働したりして問題解決に取り組めるようにする。	①振り返り学習を行い、基礎的・基本的な知識の定着を図る。理解や定着度に応じた教材や課題設定をし、生徒自らが意欲的に取り組む工夫をする。 ②授業展開の中で、他者と意見交換したりグループ活動を行ったりすることで、協働して問題解決に取り組む場面を増やす。	①生徒による授業評価の項目「授業の中で身に付いたことや、できるようになったこと」を実感することができた。評価4, 3の計が90%を超えるか。 ②生徒による授業評価の項目「他の人の考えを知ることにより、新たな気づきなど、自らの考えを広げ深めることができた」において、評価4, 3の計が80%を超えるか。	①左記の項目において2回の調査の平均は、1年生81%、2年生77%、3年生84%であった。例年よりやや低く特に後半の落ち込みが大きかった。 ②左記の項目において2回の調査の平均は、1年生79%、2年生75%、3年生84%であった。こちらもバラつきがあるが、全体として目標に近づくことができた。	①②とも学年ごとの差が大きかった。3年生は過去2年間にあった分散登校オンライン授業が今年度はなく、落ち着いて授業に取り組めたと考えられる。授業方法の改善や評価方法の見直しは継続して行っているが、より生徒の実態にあった方法の研究・実践を進める。特に各学年とも年度後半での落ち込みが大きいため、生徒の様子をよく観察し、臨機応変に対応できるよう工夫が必要である。	○年度後半での落ち込みについて学年で共有して次年度につなげて欲しい。 ○授業評価の目標の90%を超えていないが、比較的高い数値を出しているため、引き続き、目標クリアに向けて工夫していただきたい。 ○短時間でも授業に集中させることはできないか。 ○JSL 生徒に対する学力の保証を図るという4年間の目標があるが、1年間の目標になっていない。令和5年度は入れて欲しい。	①i-Unitの新たな方式による振り返り学習は、生徒にとって取組み易く1学期は想定以上の成績をあげた。しかし、2学期以降は例年と近い成績であったので、取組み内容や評価方法の見直しをして改善したい。 ②授業研究や相互観察の工夫により、継続的に授業改善に取り組んでいる。深い学びに結びつくような、他者との意見交換や協働して問題解決するような場面は、科目や単元によっても扱いが変わるので、教科での情報交換等により今後も工夫をしていく。	①i-Unitについては、端末の購入が遅れたため、開始時が多少混乱した。来年度は新入生(保護者)に声掛けをし、早めの購入をお願いする。また、繰り返し学習のため、既習事項が多くなり「新たな気づき」の場面は多くなかったことが2学期以降の成績に反映していることが考えられる。生徒の興味関心を高めるために義務教育段階の復習にこだわらず、学習内容を精選していく。 ②授業改善において他者の考えを取り入れたり、協働したりして問題解決に取り組めるようにするために教科会において定期的な情報交換をする。 ○来年度はJSL生徒が多くなるため、基礎力定着へ向けて授業展開等の工夫をすることで学習を保障し、能力に応じた学習内容を精査する。
2 (幼児・児童・)生徒指導・支援	①地域の中の学校として地域とともに規範意識の向上を図り、リーダーシップを育成する事でコミュニケーション能力の向上を目指す。 ②個別支援を積極的に推進し個々に応じた指導を行う。 ③中学校との連携や交流を生かし、部活動・学校行事の活性化を図る。 ④生徒の主体的な学校行事への取組を推進する。その活動を通して自己肯定感の醸成とコミュニケーション力の向上を図る。	①規範意識の醸成と問題行動の未然防止に努め、地域貢献できる人材を育成する。 ②不登校等学校生活に馴染めない生徒に対し外部機関との協力を通して個別支援を進めていく。 ③生徒会活動を活性化し、中高の交流を図り、その活動を通して、生徒の自己肯定感の醸成とコミュニケーション力の向上を図る。	①地域と積極的に関わり規範意識の向上を様々な場面で学べるような場を作り出していきたい。 ②学校生活に馴染めない生徒を早めに見つけ出し面談等繰り返し行う事で出現率を押さえたい。 ③生徒会本部を中心とした、地域や中学校との交流活動を円滑に進める。校内においては、学校行事を生徒の主体性を重視した企画運営で行い自己肯定感の醸成を図る。	①多くの関わりを持つチャンスを作り出すことができたか。 ②全職員が理解した上で対応策を協議できたか ③地域や中学校との多くの交流活動ができたか。また、行事の企画運営で生徒が主体的な活動ができて、自己肯定感の醸成につながったか。	①地域から積極的に関わりを持っていただき様々な場面で問題行動の未然防止と規範意識の向上につながった。 ②生徒との面談の回数を増やす事で心配な生徒への声かけを行うことができた。 ③生徒会本部を中心に、文化祭での新企画や体育祭での役員など、学校行事で企画運営に携わり、自己肯定感の醸成につながった。コロナ禍の緩和に伴い、バスケットボール部など多くの部活動で中学校との交流が始まった。	①今後はその関わりを通して生徒側から規範意識の向上を目指すような取組を促していきたい。 ②定期的に面談を行う事でより生徒理解に努めるとともに外部機関と連携をしながら個別の支援を推し進めていきたい。 ③生徒会本部を中心とした組織を活性化し、リーダーシップの取れる生徒を育成していくことが今後の課題となる。また、中学校との積極的な交流を行えるように、新たな企画を検討したい。	○粘り強い生徒指導を今後も頑張りたい。 ○中学校との連携を大事にしているが、地域他のかかわりで自分たちの必要性を感じてもらうことが必要。大事な取組である。 ○運動部文化部問わず中学校との交流をアピールすることで興味や輪が広がることを期待しています。 ○コロナ対策緩和で生徒主体の新規を期待したい。 ○部活動が活発になり、また愛川町一周駅伝に参加するなど活躍が素晴らしい。	①継続することの大切さを理解し地域との連携を積極的に行うことで規範意識の向上に努めていきたい。 ②定期的な面談を通してより積極的に生徒理解に努める事ができた。また不登校生徒を初期段階で確認し、家庭連絡を通して解消することに努めた。 ③学校行事や部活動を通して、生徒の自己肯定感の醸成につなげることができた。また、地域の中学校を招いての練習試合や練習会など多くの交流をすることができた。今後は、コロナ感染対策が緩和されることで、さらに多くの部活動で様々な交流をすることができる。	①地域との連携を積極的に持てるよう機会を作り出す事、また生徒会などと協力して生徒自ら規範意識の向上を目指すような工夫をする。 ②今後も継続的に面談等を実施するとともに外部機関との連携も進める。 ③学校行事での生徒の役割を明確にすることで、より活発に活動をさせる。また、様々な中高交流を展開するために、中学校からの要望などに耳を傾ける。

視点	4年間の目標 (令和2年度策定)	1年間の目標	取組の内容		校内評価		学校関係者評価 (3月17日実施)	総合評価(3月31日実施)		
			具体的な方策	評価の観点	達成状況	課題・改善方策等		成果と課題	改善方策等	
3	進路指導・支援	①総合的な探究の時間の活用を含む地域と連携した取組を用いながら、生徒の3年間を見通した指導により、自分の価値観を見つめ、関心分野を広げ深めた上で、主体的に希望する進路指導を実現する。	①総合的な探究の時間の活用を中心としたキャリア教育の推進により将来を見据えた進路選択が可能となる進路指導体制を確立し、保護者を含めた生徒のための進路支援体制を構築する。	①総合的な探究の時間の活用を組織的に、かつ継続的なものとして構築する。探究活動や成果発表などの探究の手法を進路決定に活用する。また、保護者向け説明会など保護者の進路意識を高める働きかけを行い、生徒とともに進路活動を進める体制を構築する。	①生徒が自ら目標を設定し、挑戦できたか。 ・総合的な探究の時間を活用できたか。 ・生徒の進路希望の達成率87%以上を超えることができたか。 ・保護者向けの進路行事を構築できたか。	①総合的な探究の時間は1、2年生ともに職業研究、分野別研究を取り入れた取組を行った。3学年は88%が希望の進路を実現できた。職員へは専門学校の良し悪しを含めた研修を行い、生徒への進路指導の一助とした。今年度は全学年の保護者向けに進路の決定・受験費用の意識を高めるきっかけの説明会を行うことができた。	①1、2年生向けガイダンスを校内で行うことができたが、次年度は校外研修も行き、より豊富な体験をさせたい。進路希望達成率は目標を達成できたが、進学就職共に学科試験を伴う試験への準備について、対策を行う必要がある。保護者向け進路説明会は、全体周知が今後の課題である。	○保護者が子どもの進路に関心を持つことはとても重要だと思う。引き続き、進路説明会等を充実させて欲しい。 ○進路希望達成度の目標を達成したことは評価できる。基礎学力を身に付かせることは大事だが、探究を通して主体的に学ぶ姿勢が身に付くとなおよい。	○探究は一部の生徒ではあるが外部での発表も経験でき、高評価をいただけたが、大学や短大との連携活動がうまく出来なかった。今後より多く連携できるよう工夫が必要である。 ○しばらく休止していた校外学習の実施にむけ、企画をしていく必要がある。 ○保護者説明会を実施できたが、参加率は良いとは言えず、しっかりと全体周知することが必要だと考える。 ○生徒の進路実現に対する取組は概ね良好であるが、特に就職の生徒で9月から活動を始めていなかった生徒は、年明けまで活動することになった。初期からしっかりと活動させることが課題である。	○1年生での探究活動をより深め、2年生で発表できるよう、継続した学習計画をしっかりと設定する。 ○大学との連携についてはオンラインも含めて連携しやすい手段を構築する。 ○保護者説明会だけでなく、進路通信なども利用し、保護者へ情報提供をしていく。さらに、保護者が来校する機会をうまく活用できるよう、検討する ○夏休み中の会社見学を制限をせず実施することで、意識の向上を図る。また、近隣の企業にも協力を仰ぎ、インターンシップへの参加を増やし、自ら考え選ぶ機会を増やしていく。
4	地域等との協働	①学校運営協議会を中心に地域との協働を目指す。また、地域・学校協働本部との連携を円滑にし、学校外の学修を推進する。	①地域・学校協働本部(明日楓会)との連携を密にし、地域交流活動を活性化し、その活動を通して生徒の主体性の醸成を図る。	①地域・学校協働本部と連携し、学校と地域との交流に重点を置いた活動を展開し、生徒会や連携生を中心としたボランティア活動やインターンシップの推進を図る。	①生徒がボランティア活動やインターンシップに興味を持ったか。地域・学校協働本部と連携して生徒の支援を円滑にできたか。	①地域連携サークル、学校外の学修、中高連携事業を中心に、ボランティア活動、インターンシップ等で地域交流が順調に進められている。	①次年度から、学校外の学修の希望者数減少が想定されるため、今後は、より明日楓会との連携を深めて生徒(参加者)募集を進める必要がある。	○明日楓会との連携など、地域との交流を進める活動は愛川高校のベースだと考える。今後も大切にしてもらいたい。 ○引き続き地域との連携を行い、その中で頑張った生徒を表彰する制度を継続して欲しい。	①地域・学校協働本部(明日楓会)と連携を密にし、多くの生徒が地域でのインターンシップやボランティアの活動を行った。また、地域連携サークルの活動において、連携生を中心とした地域や中学校との交流を展開した。 今後のインターンシップやボランティア活動は、生徒が積極的に参加できるように、明日楓会とさらなる連携を図っていく必要がある	①生徒の自己有用感の醸成のため、生徒が望むインターンシップやボランティア活動の調査を行う。また、ボランティア意識の醸成のための講演会等を実施する。さらに、地域連携サークルの各部門の活動を活性化させる。
5	学校管理 学校運営	①「学び続ける教師、変化に対応できる教師」を目指し、事故のない安全安心な学校運営の推進を図る。 ②地域との連携を深めながら、生徒にとって安全安心な学校環境を構築する。	①不祥事防止に向け未然防止に重点を置き意識啓発をし、安全安心な学校運営を行う。 ②地域との連携を深めながら、生徒・職員に対する現実に即した防災研修を充実させる。	①不祥事防止の定期的な啓発活動により、事故不祥事を他人事にならない職員集団をつくる。 ②FGC員、地域連携サークルを中心に地域と連携した防災防災活動を行う。	①事故不祥事を他人事にならない研修・啓発活動が実施できたか。 ②連携した防火防災活動が実施できたか。多くの生徒・職員が参加できたか。	①毎月の職員会議で実施する不祥事防止会議は、各グループ会議を経て行っていることから理解が深まっている。また、多くの職員が関わることから不祥事を他人事にならない雰囲気は定着してきている。 ②コロナ禍の状況で模索しながらの活動ではあったが、ほぼ通常通りの消火訓練・DIG訓練を行った。一方、地域の防災活動にはコロナの影響による未実施もあり、参加できなかった。	①不祥事防止会議について、他人事にならない雰囲気となる定着につなげる取組をマンネリ化しないよう新たに行う必要がある。 ②訓練は、より実際に踏まえて実施する必要がある。地域連携では、ポストコロナを見据えた新たな形式を含んだ活動を研究する必要がある。	○日頃の先生方の努力に頭が下がる。安全安心な学校づくりを今後も目指してもらいたい。	①多くの職員が講師をすることで不祥事を他人事としない雰囲気づくりができた。この方式となり2年目を迎え多少マンネリ化した感がある。 ②ファイヤーガードクラブ活動を始めとして、従来年4回の防災研修は実施できた。従来行われた地域と連携した活動を可能な限り実施すると同時に、ポストコロナの活動を地域と協議を進めながら計画を立てる必要がある。	①職員会議時に行っている不祥事防止会議のテーマを各グループに委ね主体的な研修とする。 ②自治体や地域との連携・協力をさらに進め、単純に以前に戻るのではなく、時代に即して災害時に的確な対応ができる体制づくり・活動・訓練を推進する。